研究覚え書き

サンクトペテルブルクの光彩

佐藤裕子

国民詩人プーシキンが「西洋に開かれた窓」と謳ったロシアの古都サンクトペテルブルク。フィンランド湾を望み、ネヴァ河沿いに築かれた美しい水の都は世界遺産でもあり、ロシア革命、ナチスの九百日間包囲に耐え抜いた、激動の歴史の舞台でもある。

エルミタージュ美術館やマリンスキー・バレエをはじめ、前衛美術を扱う名も無いアトリエや、ゴーゴリ、プーシキン、ドストエフスキーや革命詩人たちが闊歩したネフスキー大通り。壮麗な芸術都市も、確実に新たな変貌を遂げ始めている。

ペレストロイカに沸き立ち、新生ロシアとなった一九九一年秋から約六年間、語学研修を経て、国立サンクトペテルブルク大学大学院で学ぶ機会を得た。現代に通じる社会や人間の諸問題と信仰のあり方を描いたドストエフスキーの世界を研究するためであった。

ドストエフスキーが光を当てたのが、虐げられた存在であった弱者や女性、子供である。作家は強者の理論と物質文明の中で犠牲にされる側に立ち、その価値と人権を励ましの言葉とともに支え続けたと言える。また、作家が「人の不幸の上に自分の幸福をつくる生き方をしない」としてロシアの肯定美として讃美したヒロインは、民衆の大地にしっかりと根差した存在であった。民衆と信仰が作家の精神的支柱であったのである。

「人間のための学問」の追究を最大の目的とするロシア科学アカデミー発祥の地でもあるサンクトペテルブルクに東洋哲学研究所のロシア・センターが開設されたのが、一九九七年。戦火から人類の至宝である法華経の写本を守り抜いたロシア科学アカデミー東洋学研究所内での誕生であった。「平和」を呼びかける経典が、シルクロードを経て北の大地で守られ、日本での展示会でその光彩を放った日のことは忘れない。

創立者が開いて下さった崇高な学術交流の道に深く感謝し、文化と社会に益する研究を目指し、日々精進して参りたい。

（さとう　ゆうこ／東洋哲学研究所委嘱研究員）